

本が自分のものになる

鈴木 輝 康

月日の経つのは早く、僕が入学してから一年余りになってしまった。入学当初は膨大な蔵書を大いに活用しようと意気込んでいた。

つい先日、夜遅くなつては朝の講義には差し支えると思ひながらも、読みおわらずには寢床に入りたくはないと思う本があった。一通り読み終えた今、その著者の鋭い洞察、思考方法に感激し、僕はそれをノートを取りつつ読み返している。この本はM・ブランクの著作を図書カードで検索している時に偶然見つけ、この書物を蔵している部局図書室をあちこち尋ねて求めたのだが、ある部局だけ特別に短期貸出しを認めてくれ、毎週その部局図書室に足を運んでいる。この本により自分の思考方法が力づけられ、自分の内に潜んでいた新しい芽が萌えてきたように思える。

若い！それはあらゆる可能性を十分にその内に秘めている。その可能性を芽生えさせ、培ってゆくものが、良き師であり、良き友であり、良き書物であって、いずれもそのめぐりあわせは全く偶然的な“運”に支配されている。その運に出合う機会を多くするためにも若い学徒には、できるだけ多くの書物を開放すべきではなからうか。何時、何処で、開いた頁の行間からすばらしい着想が生じてくるか解らない。これは大きなエネルギーを内に潜め、柔軟で、比較的頭の回りの早い、若い私達に期待されてもよいと思われる。

部局図書室の蔵書はその部局での研究のために各部局毎に割り当てられた予算で購入されたものであるから、部局関係者を優先すべきであるが、他学部生の読みたい本を書架に淋しく眠らせておくのは何と残念なことか！求めている者にこそ、このような本を目覚めさせ、活動させる機会を与

えるべきであると思う。書物は読みたいと思った時にじっくり読んでおかないと、その時期を逸しては、ついゆっくり読む機会を失い、仕事のためにのみ読むことになって、書物を読みつつ、思索する余裕はなく、そこには何ら新しい芽は存在し得ないと思う。

しかし、僕らの権利だけを主張するのではいけないと思う。公共の図書は自分のものでもあり、他人のものでもある。自分のものとして大切に扱う反面、自分が強すぎて、他人のものも自分のものとしてしまわないように、書物の中に書き込みを入れたり、期限内の返還に遅れることなどには十分注意しなくてはならないと思う。そこで、各部局図書室において定められた期限内に必ず返還し、部局内で必要になった時にはすぐに返すとか、また本の顔に傷をつけないなどの責任ある態度を取ることにによって、短期間の貸出しは認められるのではないか。新しい建物の中には新しい風が吹き込んでいるはずであるのに、なお古い封建の空気が溜っている。その空気を新風に変えるために、私達各自が責任ある態度を取ることににより、また各部局も相互に施設を開放し、利用しあうことなどによって大学組織全体の運動とし推し進めてゆくべきではないか。

このようにして読みたい本が自由に借りられる。その上、時には必要と思う箇所をノートに取りながら、また原著と照し合わせつつ読むこともある。ノートを取ることは目だけでなく手でも学び取り、あいまいであったものが具体的に解り、内容も詳しく検討されて著者の語ろうとしているものが自分の体を通して、実感として理解でき、自分のものになったという感じを強くする。このようにして読んできて、論述の高まりを感じ、こころ思う最も肝腎な部分が切り取られているのを見いだした時ほど腹立たしいことはない。複写室もあることだし、複写できなければ自分の手で写し取ればよい。必ずその効はあるはずだ。一冊の本が真に自分のものとなるには、心・身・頭の鍛錬が必要に思われ、焦らず、休まず、本を自分のものにしてゆきたい。(教養部)